

千里ニュータウン情報館ミニシンポジウム

「トイレトペーパーがない！から 50 年～私たちは進歩したのか」

2024 年 3 月 3 日(日)14:00-16:00

◎コーディネーター

村田麻里子さん(関西大学社会学部教授)

◎パネラー

・蓑輪幸彦さん(NHK 大阪放送局 映像制作)

・赤井直さん+奥居武さん

(当時の千里を知る主婦と子ども)

村田

ただいまより千里ニュータウン情報館ミニシンポジウム「トイレトペーパーがない！から 50 年～私たちは進歩したのか」を開催いたします。私は関西大学の村田と申します。今日の司会を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

私は 1974 年生まれなのでこの騒動を知らないんですね。知っている世代から知らない世代へ継承する役ということで話をいただいております。

蓑輪

NHK 大阪放送局の蓑輪と申します。私も当時生まれていない世代ではあるんですが、去年トイレトペーパー騒動を題材に記事を書かせていただきまして、その縁で呼んでいただきました。今日はよろしくお願いいたします。

村田

昨年、千里中央のピーコックの閉鎖に合わせてトイレトペーパー騒動を取材して記事と番組にされたということで、このあと番組を視聴したいと思います。

赤井

トイレトペーパー騒動の時代を千里で生き抜いたというか、真っ只中で生活していました。私は当時一番大変だったのは灯油の問題だったんです。あの当時は暖房ってほとんど灯油やったんですね。灯油が欠如、品薄になって値段も上がっていくし。寒い冬に向かって灯油がなくなっていく、手に入りにくくなっていくことを経験して、今地震で被災された方の暖房のない生活が身に染みて感じられます。

村田

赤井さんは当時 30 代で、当時の千里の主婦代表ということでお越しいただきました。当時の状況を体験されているので、そのあたりのお話をしていただければと思っています。

お話しされたように、1973 年に第一次オイルショックが起きて、トイレトペーパーは

もちろんですが何よりも灯油が不足した時期ということですね。

そして3人目は今日の企画をしてくださった、当時は中2。千里の子ども代表ということで奥居武さんです。よろしくお願いします。

奥居

北千里の藤白台に、当時も今も住んでいる奥居といいます。60を過ぎて子ども代表というのはすごい恥ずかしいんですけど、ある程度ちゃんと覚えていますので当時の記憶を皆さんと一緒に掘り起こせるかなと思っています。よろしくお願いします。

村田

今日はトイレットペーパーを1つの触媒にして、当時の千里ニュータウンの様子をさまざまな角度から振り返ることができればと思います。ぜひフロアからもご発言ください。

では、まず菘輪さんが作った映像をみんなで見たいと思います。9分ぐらいの映像に当時の様子がよくまとまっていますので、まずそちらを見たいと思います。



どんな騒動だったのか

(映像視聴～NHK「ほっと関西」2023年5月12日放送より)

参考 URL…<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20230428/k10014050991000.html>

菘輪

1973年のトイレットペーパー騒動の当時、実際にどんなことが起きたのか。6名の方に直接お会いして、文献を調査したりして作った映像です。赤井さんもそのおひとりです。

印象に残ったのは4年前のコロナ禍でトイレットペーパーがなくなり、当時私は東京に住んでいてトイレットペーパーを買えなかった経験があります。トイレットペーパーがなくなるという噂が4年前も1973年当時もあった。自分もなくなるなんて信じてないのに「みんな買ってるから買わなきゃ」というのは同じなんだなとすごく印象に残っています。

当時を振り返って、人間って変わらないんだと知ることによって将来同じような騒動が起きないようになったらいいなという思いも込めて作りました。

村田

私は間違いなく買いに走るタイプです(笑)。私の母はのんびりしていて、当時のことを聞いてみたんですが、全然何もしなかったと。性格もあるかもしれないですね。

ちなみに、店頭でのトイレットペーパーをみんなが取っていく映像や、主婦の方が自宅の押入れにトイレットペーパーを押し込んでいるシーンはNHKのアーカイブからですか？

菘輪

そうなんです。当時のアーカイブ映像は撮影した内容が詳しくわからないものもあり、お

そらく千里ではなくて、全国に騒ぎが広まったあとに皆さんが買い漁っている映像です。

村田

どういうふう取材する方を探したんですか？

菱輪

メディアでさんざん取り上げられてきた話題でして、民放でもやってますし、NHKでもこれまで何度か取り上げています。近いものだと6年ほど前にも。その時の取材記録をひもといてお会いしたり、そこからさらに「この人に聞いてみるといいよ」と話を伺ってお会いした方もいます。

村田

そのキーパーソンの一人が赤井さんで、情報をたくさん持ってらっしゃるので、赤井さんから当時の状況を振り返るかたちでお話をしていただければと思います。

赤井

今はマンションに住んでたら同じフロアの人でもご近所付き合いがない。隣にどんな人が住んでいるか知らないで生活しているんですけど、当時の団地は棟全体、住区全体みんなお互い知り合いだった。いろんなことでいろんな人と広く交流があつて。住んでいるお互いをみんなよく知ってたから情報伝達が早かった。それだったと思うんですね。何かあつたら、いろんな話をした。

それと、千里ニュータウンに当時住んでいた人は、私は生まれも育ちもほぼ大阪で親も大阪人なんですけど、そういう人は少なかったように思うんですね。地元から離れて大阪で就職して、そういう人が多かったように思う。だから近所とのつながりがなかったら職場以外でどこともつながりがない。

当時の主婦は、ほとんどの人が外で働いてなかった。やってるとしたら内職、家でやる。友達とグループを組んで内職したり。だから余計に家にいる者同士でいろんな話し合いも密だし、お昼も一緒に食べるし。子どもも一緒に。買い物に行く時でも、子どもを連れて行けない時は近所の人「見ててあげるから行ってきなさい」と。お医者さんに行くのも。みんなお互いにそうやって。今みたいに保育所がたくさんあるわけじゃないし。みんなそういう生活をしてたんです。

隣近所との接触が密だった。みんながそういう生活をしてるから情報の伝達も早い。

村田

映像の中で「千里5分」…千里は5分で噂が広まるとおっしゃっていましたが、当時の皆さんもそういう認識があつたんですか？

赤井

今みたいにインターネットがないじゃないですか。だから口コミ以外にないですよ。団地は、今のマンションみたいにフロア構成じゃなくて階段構成だから足音が聞こえるんで

す。どっか行ったからどこ行くんやろとパッと開けて「どこ行くの」と聞くんです。「どこどこ」と「そしたらついでになんやら買って来て！」とかね。そんな生活ですよ。当時の方はみんなご存じだと思う。家の中にいても階段を降りていく音が聞こえるから、どっか行くんやと思って「どこ行くの」って聞くんですよね。今みたいに、ちょっとすましたり、そんな生活じゃないんですよ。お互いの生活が丸見えだったと思うんですね。

村田

千里ニュータウンは1962年から入居が始まって、皆さんいろんな所からやってきていると伺いました。その意味では、環境が違う所にきてみんなが心細い。同時に、同じような世代、家族構成で、専業主婦も多い。家庭環境が似ていてみんな子どもを育てるみたいな空間だったということですね。その中で、私の情報はあなたの情報というか、情報はみんなのものみたいな空気があった。ちなみに内職はどういうことをされていたんですか？

赤井

私自身は内職をしたことはないんですね。友達の所へ行くと内職をしてそれを手伝われるの。手伝いながら喋ってるの。工賃をもらったことはないです。私が覚えているのは、ハンカチを畳んで箱に入れたり袋に入れたり。よく箱作りをしてましたね。箱作りはかさ高いので、配達に来たら階段下に積み上がるんです。それを部屋まで何回も運んで。そしたら「何してんの？」とみんな出てきて自分の仕事じゃなくても手伝う。そんな生活でしたね。

だから細かいプライバシーというのはなかった。そんな言葉もなかったしね。家に鍵なんてかけてなかった。なんか用事があったらガラッと開けて、こんこんとノックして開けてね。そんな時代だったから今とはまったく違うんですよ。

お互いのいろんなことを知り合って。離れてる実家からお母さんが来はったらお土産を持ってきてくれる。そしたらまたお母さんといろんな話をする。自分のことは他人のこと、他人のことは自分のことみたいな、そういう生活だった。今だったら子どもを人に預けるのは難しいでしょ。預かるほうも警戒しますよね。ケガさせたらどうしよう。預かってる間に病気にでもなったらどうしよう。責任問題を問われたり。でも当時はそんなことないから、まったく考えもしない。みんな子どもを預けあって生活してました。和やかな生活でしたね。

村田

では子どもにお願いします。

奥居

子どもといっても当時は中学校2年生でしたので、ちょっと大きいんですが。ほんとに大人も子どもも千里の人たちは好奇心満々ですごい情報意欲が強いんですよ。僕の学校の成績を知らないおばちゃんを知っていたり。

その頃、学校が校長派と反体制派に分かれてて。反体制派の先生はどんな授業をしているのかを、おばちゃんが僕を通じて調査しようとするんですよ。「ちょっと復習したいから、教材をうちの子どもに見せてあげてくれない」と。貸すと反体制派の教師はこんな教材で授業してると。あとでそういうふうに使われたと知って、めちゃくちゃ怒ったんですけど。そ

んなことだったから誰が何を知っててもおかしくない状況で。

うちは母親が当時、北千里のYWCAで英語を教えてたんですね。トイレトペーパー騒ぎが起きた日は英語の授業があって、11月1日の木曜日だったと母親は言っていました。授業は曜日が決まっていたし、11月1日というキリのいい日だったのではっきり覚えてると。YWCAにいる時に「スーパーで紙製品がなくなってるみたいよ」という話を聞いたんだけど母親は授業を放ってスーパーに走っていくわけにもいかず、クラスを気もそぞろにやって、夕方北千里のスーパーに走っていくともう棚は空っぽで、リードペーパータオルしか残ってなかったと。当時はあんまりペーパータオルを使う習慣がなかったんでしょうね。やむをえずトイレトペーパーの代わりに「きょう大変なことがあってこれしかなかった」とペーパータオルを持ってしょぼんと帰ってきた。

僕自身は学校から帰宅してスーパーに走った記憶はないんですけど、ペーパータオルを見るたびにトイレトペーパー騒動を思い出しますね。代わりに使うわけにもいかないし。トイレトペーパーはたまたま買い置きがあったので困ることはなかったんですけど。

あの時、母親は出遅れたので自分が騒ぎに加担したという負い目を背負わずに済んだのかなとも思います。

先生も親も子どもも入り乱れて情報戦をやってましたね。いろんなことで。どんな授業をしているとか。「紙がなくなるぞ〜と先生が言った」という話もあったし。「あんな授業をするからパニックが起きたんだ、あいつのせいや」と生意気な中学生が言うわけですよ。

すごくみんな積極的で楽しかったです、めっちゃくちゃ。親にやられたらこっちもやり返すみたいな環境でもあったので、ざっくばらんなコミュニティだったなと思います。

村田

お2人の話を聞くだけで、トイレトペーパー騒動が起きる土壌はバッチリ出来上がっていたという感じがしますね。

噂って最大のメディアで、戦時中でもどんな状況でも強い。これだけのコミュニティがぎゅっとひとつの地域にかたまっていて、日々噂を肥やしにしながら皆さん楽しんでた。そういう土壌があったということが、お2人の話からよくわかりました。

菱輪

取材していて、この町にとって黒歴史だったと思われる方がある程度いらっしゃるなと感じていて。「私は買ってないけど行列は見た」とか、「私のせいで騒動が広がっちゃったんじゃないか」と思ったりする方もいらっしゃいました。調べていくと誰がスタートというわけじゃないんだとわかりましたので後ほど。

村田

自分が広げたかもしれないという負い目をなんとなく背負っているということですね。会場の皆さん、トイレトペーパー騒動のご記憶がある方がいればぜひご発言ください。

(参加者)

当時中3だったんですけど、騒動は映像で見て。トイレトペーパーがなくなって苦労

した思い出はあんまりなかった。箱に入ってるクリネックスのティッシュが普及し始めてた頃で、その前までは箱に入っていないちり紙が主流だった。

それよりインスタントラーメンの「出前一丁」が 20 円ぐらいだったのがあつという間に 40 円に上がったほうが切実な問題で、このままいくとラーメン食べられるかなと。そっちのほうが気になってましたね。

村田

一気にいろんなものの値段が上がっていった時期なんですね。物価高とか灯油が足りないとかもあわせて、なんとなくこのままだと危ないという空気があった感じですね。

(参加者)

当時 20 歳だったんですが、某ゼネコンに入って倉敷の水島工業地帯の現場にいました。その年の 4 月に入社して、10 月ごろかな、関西の実家に電話したんです。おかんが「トイレトペーパーがないんや」と。なんでないのかわからないんですよ。その時、倉敷にはまだ騒ぎが波及してなかった。寮にあるのはトイレトペーパーではなくて四角い落とし紙。今では若い子に「落とし紙」と言っても通じないですね。四角く束になってるやつ。だからトイレトペーパーがなくなる現象がにわかには信じられなかった。

あとからネットで調べると「千里から始まった」。ほんまかいなど。淡路島の知り合いにも聞くと、その騒動は淡路島ではなかったかなあと言っていました。

村田

騒ぎは全国で起きていたという感じでもなかったんですね。

(参加者)

どう順番に伝わっていったのか興味があります。

「全国的現象」ではなかった？

村田

千里ニュータウンは水洗トイレの率が高くて、斬新な新しい町だったからこそその脆弱さでパニックになったんじゃないかと展示解説には書かれていました。

水洗トイレは落とし紙も流せるんですか？流せない？

奥居

詰まるんじゃないかな。落とし紙は買ったことない。ティッシュもダメですよ。

村田

水洗トイレにはトイレトペーパー以外は流さないでくださいと。今でもティッシュはダメですよ。

(参加者)

当時は名古屋で下宿してまして、実家は吹田なんですけどね。トイレトペーパーは歴史の出来事としてしか知らないんです。名古屋の下宿は水洗だったんですが、トイレトペーパーがあるような高級な下宿じゃないんで落とし紙でした。トイレトペーパー騒動が起きてるんやな、でも名古屋は全然ないよねという記憶です。

名古屋でもトイレトペーパーがもしかしたら不足したのかもしれませんが、私は普通に生活してて何ら困ったことはなかったです。

村田

水洗でもちゃんと下水管までつながっているものと、私の祖母の家のように家の出口までは水洗でも、結局は溜めていて汲み取りの回収車が来るという 2 種類がありましたね。どっちでしたか？

(参加者)

下宿だったので、どんな構造になっていたかは…。たぶん名古屋の町なかやから全部水洗だと思いますけどね。名古屋市内のど真ん中でしたから。

(参加者)

千里じゃなくて江坂のほうから来ましたので、ちょっとわからない。

村田

すると騒動は「ニュータウン現象」だったのかもしれないですね。

菱輪

当時テレビとかで報道されたと聞いてるんですけど、実際にどう報じられていたか？新聞はあるんですけどテレビは記録が残ってなくて。皆さん他の地域で千里が発端になってるらしいというテレビを見た記憶がある方はいらっしゃいますか？

(参加者)

当時は愛媛の松山にいました。連日大阪ではえらいことになってるという話があって、それが松山に来るのかなと期待してたけど…期待はせんけど何となく来たらどうするんやという感じでしたけど…そんな騒動はなかった。NHK 松山でも、松山市内でトイレトペーパー云々という報道はなかった。全国ニュースではあったと思う。テレビではどのニュースでもやってました。昭和 48 年ですよ。日本列島改造の頃でしょ。とにかく都会のほうはえらいことになるとるなという感じでした。田舎では幸せにやってました。

愛媛では当時、NHK と民放が 2 つやったかな。カンテレ系と日テレ系。テレビ朝日だけがなかった。あれは広島テレビをアンテナを立ててやらんと見えへん。「みごろ！たべごろ！笑いごろ！」という人気番組も、松山では見られなかったんですよ。

村田

赤井さん、実感がないというお話が多いんですが、実際にはトイレットペーパーそのものには困っていなかった？

赤井

困ることはなかったですね。当時は…あとの話ですよ…押入れいっぱいトイレットペーパーを入れてたとか。それを放り出して部屋がトイレットペーパーばっかりとか、そんな話はよく聞きました。やっぱり皆さん買い込んでたんですね。きっとご主人は知らないけど奥さんはすごく苦勞して買い集めてたという現象もあるかもしれない。

その当時友達が紙屋さんをしてて。その人に「えー、そんな心配ない。なんぼでもあるよ」と聞いて、やっぱりそんなことだと思ったから買いに走った経験がないです。買いに走らなかった人もけっこう周りにはいましたけどね。失礼やけど並んではる人は「なんで並びはるの？」というような感覚で見てた覚えが。

たとえばお醤油がなくて、今日はお醤油の売り出しやからと並ぶ。お醤油なんてなくなったことないのにそれでもやっぱり並んでた。お砂糖の時も並んでた。そんな習慣が付いてしまっていたのか。並ぶ人はいつでも並んでたように思いますね。

村田

さっきフロアの方から物価高というお話がありましたが、そうすると特売には並ぶ、トイレットペーパーもたまたまピーコックの特売日と重なって…。

赤井

特売じゃないんですよ。お醤油が不足してるから今日はお醤油の販売がたくさん出ますという、その時に並ぶ。特売ではない。そんな記憶がありますね。

みんなが一番苦勞したのは灯油の問題ですよ。千里山生協の組合員には「心配しなくても確保できてますよ」と。でもある程度上限を決められて。灯油はこれだけとわかってるから、コントロールしながら使っていた記憶はありますね。今みたいにどこでも売ってなくて、18 リットルのポリタンクを持ってあちこちに買いに走られていた方がけっこういらっしやっただけの記憶があります。それはパニックとは違うんですが。オイルショックから紙の話になったわけでしょ。その根本は灯油だったと思うんですね。

千里ニュータウンはみんな水洗だったから、トイレットペーパーがなかったら困るんですよ。落とし紙では用をなさない。だから千里の人はトイレットペーパーがなくなるといふ噂が出た時に苦勞したけど、普通の町の人は落とし紙があつたら十分だからそんなものに翻弄されなかったということでしょうね。ただただ「トイレットペーパーがなくなる」といふ噂だけだから、紙自体はあつた。町に行けば落とし紙が。

さっきの映像に出ていた人は奥さんに頼まれて出張に行くたびにその土地でトイレットペーパーを買わされて、袋一杯持って帰ってきたという笑い話をしてはりましたよ。

村田

ある意味、地域特有のものだったということですね。全国的なものだとイメージしていた

んですが。

奥居さん、ニュータウンならではの現象というか原因は他に何か考えられますか？

奥居

長いこと千里の人たちは「私も喋った」「私も買いに行った」「だから騒動が広がって全国的な騒ぎになっちゃった」と後ろめたい気持ちを持つ人が大勢いらっしやったんですけど、そんなに千里の人だけが自分勝手だったんだろうかと。

全戸水洗の町は当時は珍しかった。水洗化率を調べると全国平均で 30% ぐらい。でも千里ニュータウンだけは 100%。他の団地も 100%。ということで詰まらせるわけにいかないから絶対にトイレトペーパーが要る。生活の必需品だから買いますよね。

団地の友達ってご近所に音も筒抜けだし、お互いのことをよく知ってるし、迷惑かけちゃいけないという気持ちが大人も子どももすごく強くて。それと結びつくと、「詰まらせるわけにいかない」というのが一番要素としては大きかったんじゃないでしょうか。

自分だけの問題だったらまだしも、少なくとも上にも下にも迷惑がかかるのが団地。

赤井

1 軒が詰ませちゃうと最大 5 軒はトイレが使えなくなるんですよ。最悪の場合はお向かいまで。昔は工事もずさんだったんですよ。1 軒 1 軒じゃなくて、こっちのパイプと隣のパイプが途中で繋がってるんですよ。ここがダメになったら、隣の列もダメになる。そういう建物だったから。メーターボックスはコンクリートで仕切られてるはずですよ。ところが潰してみたらベニヤ板だったり。

村田

千里ニュータウンでは、初期の団地は 2005 年ぐらいから建替が始まりましたが、初期の団地は、そもそもインフラや構造に脆弱さみたいなものがあった。

そしてどちらかというと自分が困るからというよりも、人に迷惑をかけられないという。常にコミュニティが、人がまわりにいる。トイレを流す音も聞こえる感じですよ。

1973 年と 2020 年の違い

赤井

問題としてはすぐに終わった問題だから。50 年も経ってまた騒動が再現するなんて思いもよらないことで。

今の人是我れ先という意識ですけど、当時は我れ先にじゃなかったと思うんですよ。ご近所でいざという時は貸し合いしてたし。貸してくれるけど返さない、お貸しくささいとかたちでいろんな交流があったから、自分本位の生活じゃなかった。お互いの共同生活的な意味もあったので、やっぱり人に迷惑かけないで。自分だけちゃんとしようじゃなくて、お互いの生活がちゃんとできるようにしましょうという感覚で生活していたと思います。

村田

そこがお話を聞いていて面白いなと思いました。2020年にコロナ禍で最初はマスクが足りなくなり、つづいてトイレットペーパーがなくなり、その後もみんながインドア生活を始めたので売り切れになる品目が続出。SNSでいろいろな情報が流れた。だから1973年と同じようなことが起きたという見方もできるんですけど、お話を伺うと本質的には全然違うなと思いました。

コロナの時は、自分のところがないから困るということ。一方、トイレットペーパー騒動は、当時のコミュニティや人間関係のあり方と、当時の社会の構造的なものが強く働いて起きた。トイレットペーパーという媒体からそれが見えてきたような気がします。

どうでしょうか皆さん。生き字引のような人たちに何か聞いてみたいことはありませんか。私自身はなぜ皆さん来てくださったのかすごく興味津々なんです。

(参加者)

トイレットペーパー騒動の時は三重県にいました。三重県ではトイレットペーパーに困ったということは聞いていないし見ていなかったような気がします。私は塗料メーカーの営業をやってましたが、あんまりトイレットペーパーに困ったという話は聞いてない。それより仕事の塗料のほうで困ったのを覚えています。

営業をしている販売店の倉庫を覗くと電気屋さんが漁っていて、「なんでもいいから売ってほしい」と。古くて沈殿して使えないんじゃないかという塗料でもどんどん買われて倉庫が空になったのを覚えています。石油パニックで塗料が作れないとなって、私が担当していた所に塗料を納められなくなった。

当時は造船所で大きな船を建造されていて塗料を尼崎工場から運ぶんですが間に合わなくて。上塗りの工程を減らしてほしいとオーナーに頼んだことも覚えています。

今ニュータウンの桃山台に住んでますが、誰が住んでるかわからない。昔はお互いに挨拶をしたり助け合う社会だったと思いますが。マンションのせいかな。なかなか挨拶がない。子どもに挨拶すると変な目で見られたり。そんな社会になっちゃったんだなあと。

転勤で青森にいたことがあります。雪の中でもすれ違おうと「どき(どこ行くの)」「湯さ(お風呂に行く)」と。ちゃんと会話をしていました。今の千里には挨拶がなくて残念です。

村田

能登の地震で、地元の皆さんが移動したがないのが印象的でした。強いコミュニティが地域によってはまだあるんだなと。一方で阪神・淡路大震災の時は、神戸の建物がダメになって、戸ごとの独立性が高い高層の住宅を建てて、やはりコミュニケーション不足の問題が起きた。

子供に「知らない人に喋りかけてはダメだ」と教育しなくてはならないことや、住宅の構造など、そこにはいろんな要因がありますね。

(参加者)

74年生まれです。赤井さんに質問です。騒動はそんなに長く続かなかったということですが、体感的にはどのぐらいでしたか？

赤井

トイレットペーパーは半月、1週間か2週間ぐらい。半月も続かなかったと思うんですけど品目によって尾を引くのはありましたね。

何十年たってある人から聞いたんですけど、その頃豊中の庄内で店員してた人が「お砂糖がなくなる」と。お砂糖売り出しの日にはすごく並ばれて。店員だった時に量り売りしてたと言うんです。お醤油の日とか。日があつて並んだと。トイレットペーパーから遅れてそうだったと聞いたことがあります。トイレットペーパー騒動はそんなに長くは続かなかった。

(参加者)

当時、味の素は石油から精製してるからなくなるという話が。影響はなかったですか？

赤井

味の素が石油からという噂は聞いたけど、影響はなかった。今みたいにいろんな知識がないじゃないですか。主婦は毎日ご飯を作るぐらいしか考えてないから。石油からどうのって、今だったら公害だとか体にどんな影響があるか。当時はそんなこと言ってなかった。

(参加者)

ニュータウンの特色としてコミュニケーションがあつたと。ならば、押入れに入れていたという話もありましたがトイレットペーパーを工面しあう場面はなかったのでしょうか？

赤井

生活してる中では工面してました。並んだけど買われへんかった人には「うち2つ買うたから1つあげるわ」とか。そういうことはあたりまえのことでした当時は。

(参加者)

ありがとうございます。

村田

味の素は石油から作っているという噂があつたんですね。そういえばファンデーションや口紅も石油を使ってるんですよ。その意味ではオイルショックはいろんなところに影響を与えてるはずだけど、灯油はパニックの原因にならず、トイレットペーパーはなつた。

養輪

その後、騒動について振り返ったNHKの番組を見ると、ある番組では「千里には11月5日に大量のトイレットペーパーが入ってきた」と。「11月6日には行列は消えた」と。読売新聞だと11月11日の全国版で「関西から火がついたちり紙パニックがようやく鎮静化してきた」と。11月1日が起点と考えると※1長くても2週間弱ぐらいだったのかな。おそらくその間にいろんなモノがなくなって、灯油が足りなくなったり。

赤井

時代背景というか、千里ニュータウンは水洗トイレが100%だったという。そこに問題が起因してるだけで。旧市街の人はトイレットペーパーがなくなっても何の心配もないわけです。だからニュータウン独特の話であったと思うんです。

ステンレスの流し台なんて旧市街の人は使ってないわけですね。たたきの流し台。お風呂もガスとか水洗トイレとか。そういう生活様式が全然違うから感覚も違ったと思うんですね。必要なものが違うじゃないですか。

(参加者)

落とし紙騒動はなかった？

赤井

そうそう。落とし紙騒動はなかった。

(参加者)

松山において、そもそもトイレットペーパーを見たことがないぐらい(笑)。要るとなったら落とし紙は新聞紙で作るし。都会の生活って大変だなと思いましたね。そりゃ広がらなはずですよ。誰も不便を感じてない。トイレットペーパーがなくなったって。

村田

トイレットペーパー自体、生活必需品じゃなかった。

(参加者)

テレビでしか見たことなかった。

奥居

当時の朝日新聞の大阪版の記事が手元にあります。11月2日に記事が出て、11月3日に「トイレ紙緊急輸送」と騒動を打ち消しにかかっているんですね。政府がものすごく早かった。緊急販売をこのお店でやりますよと11月5日ぐらいにあって、すごく対応が早かったのと、尾を引いたところも含めて2週間ぐらいだったのかなと。紙に関してははですね。

灯油に関しては、10月の終わりはまだ暖かいじゃないですか。今ならキャンドルイベントをやっている頃ですよ。寒くなってきた時に灯油がなくなったらまた騒ぎが再燃するんじゃないかという恐怖心があって、年末に千里ニュータウンでは灯油の特別販売がありガソリンスタンドまで買いに行かされた。写真も展示しています※2。駅前のガソリンスタンドで、年越しに向けては通常でも買いだめをしますから。年越しに灯油がないと大変だと。灯油はトイレットペーパーとずれて心配が沸き起こった。

遅れてノートがなくなって、店頭に戻ってきたら20円が60円になっていたりそういうことはありましたね。高くなって戻ってきた。便乗と言っていいのかわからないけど。

千里はメディアの町だった

村田

この騒動は、メディアパニックだったとも言えますね。メディアがなるべく煽らないようにしようとかそういう意識はまだマスメディアになかった時代でした。むしろセンセーショナルに報道をしていた時期だと思うんですね。つまり、そこにはメディアの役割や作用もあったと思うんですが、そこはいかがでしょう？

菱輪

テレビがどう伝えたかという記録が残っていないのが調査が難しかったところなんですけど。映像は残っていて、NHKでも千里ではないんですけどものすごい行列だった様子を連日伝えていたり。それを民放ならどう伝えていたのか。

なぜ11月1日に千里から騒動が始まったとされているのかを調べてみると、実は初めてトイレットペーパーが買い占められる騒動が起きたのは千里ではないということがわかってきて。それより前の新聞で10月29日に奈良の橿原の団地でちり紙が売り切れた騒動があったり。同じ頃に横浜の団地でトイレットペーパーが一気に買い占められる騒動があった。10月25日「200人ぐらいの主婦が殺到、転倒するなど混乱」という記事があった。

千里が一番最初じゃないんですけどなぜ今に至るまで発祥の地だと言われているのか疑問じゃないですか。記事を書いていて「千里ニュータウン発祥」すらガセなんじゃないかと心配になって。その後どう伝えられてきたかを検索できるかぎり調べたんですけど。

1985年ぐらいから現在に至るまでの新聞記事を中身込みで検索できるサービスで「トイレットペーパー騒動」という言葉で調べたところ、すべての記事を見れたわけじゃないんですけど、タイトルからその中身を見ていく作業をしていって。70件ぐらいの記事がヒットして、その中で実際に騒動について書いていると思われる記事を。だいたい半分ぐらい見たんですけど、千里ニュータウンとか大阪、吹田、豊中という場所が書かれている記事はあったんですが、それ以外の奈良とか横浜を書いてある記事は僕が見たかぎりは1個もなくて。

とすると、その後なんらかの力とか理由で千里が発祥とされた。それはなぜか。推測ですけど、新聞記事やテレビで一斉に報じられたのが11月1日とされている日なんじゃないかと。それがきっかけで全国に広まったということじゃないかと推測をしています。

村田

昔のテレビ放送はテープが高価で上から録り重ねていたの、記録があまり残ってないんですよ。それで新聞記事を調べると70件ヒットしたと。どういうキーワードで？

菱輪

「トイレットペーパーの騒動」というキーワードで調べました。いわゆる社説とかで「かつて騒動があった」とか「2020年の騒動」話とか、3行ぐらいの記事もあつたりするのでそういうのを除いたうえで調べたという感じです。

村田

万博のあった千里というのもありますね。「千里」という名前に知名度があった。騒動は万博から 3 年後で、まだ皆さんの中に千里のイメージがあって、メディアも使いやすかったし、みんなの記憶にもより残ったというのが 1 つ。

あと 74 年生まれの私からするともっと全国的なイメージがあったんですよね。唯一残っている、さっきのような映像が繰り返し、「中東戦争」や「オイルショック」のニュースのたびに挿入されて、問題があった以上に大きな「集合的記憶」になっていったというか。メディアの中のトイレットペーパーみたいな。そういう問題もあるんですね、きっと。

(参加者)

今回の展示解説に、奥居さんの文章ですか？「千里にマスメディア関係者がたくさん住んでいた」と。彼らがおおいに発信してた。奈良の橿原にはそんなに集まらないでしょうし。ここなら通勤しやすいし。いたんじゃないですかね喋りが。

村田

取材がしやすいということですね。

奥居

メディア関係の人って仕事が忙しいんですよね。出張も多いので、便利な所に住まなきゃいけないというのもある。千里は大阪市内へ 1 本で行けるし、新大阪も大阪空港も近い。

去年、蓑輪さんが番組を作られる時に取材を受けて、一緒に映像を見たりした時にピーコック前の歩道に行列してる映像が、ある時は歩道橋の南側に行列していて、ある時は北側に行列。つまり違う日だということなんですね。違う日の両方の映像がある。なんでそんな記録が残ってるんだろうと。それは千里の中にメディアの社員が住んでいたから。蓑輪さんも吹田のお住まいで。

この情報館で千里の古い写真を集めてアーカイブにしているんですけど、たくさん写真を提供してくださる方がみんな新聞社のカメラマンなんですね。朝日新聞だったり中日新聞、日経。そういう方が大勢住んでらっしゃる。昔も今もそうなんですよ。結局、便利だからということですね。だからわざわざ取材に行かなくても、近所を一回りするだけで写真が撮れて。直行直帰にもものすごく便利。そういうことが大きいんじゃないかと。

村田

地理的な理由ということですね。東京に行きやすく、新しい地域ということもあってたくさんメディア関係者が住んでいて取材がしやすかったというもうひとつの側面が出てきました。たまたまそこにメディアのカメラがあったから残っているものとか報道されたものがすごく大きくなった。そういうメディア史の観点から見ると面白いなと思いました。蓑輪さん、取材された時にそういう点には行き当たりしましたか？

蓑輪

実はマスコミが悪いんじゃないかというのは初期の段階から気付いていて。

村田

悪いとは言ってない（笑）。

養輪

さきほどの映像にもありましたけど、取材に応じてくださった店員の方は翌日の新聞記事でセンセーショナルに書かれたことをわりと根に持ってらっしゃって。今でも「あれは許せない」とおっしゃってました。

われわれは新聞ではないので文字情報が残ってなくて記録にないだけで、実は責任の一端を担っているんじゃないかと。さらに言うと今これをお伝えすることで、また次の騒動を生むんじゃないかという。そういうリスクの話もしたんですけど。

村田

その方は「あの時のメディアね」という感じだったんですか。

養輪

そうですね。「君たちの力は大きいから」と。

村田

「自覚を持ってね」という感じの。そうか。そういうメディア体験が千里の皆さんの記憶にあるわけですね。

(参加者)

当時のリアルタイムの記憶がないんですよ。あの映像が何度も何度も、何かあるたびにテレビで映されるので逆に洗脳されて「そうやったんやな」という感じ。イメージしてたのと、みんなが喋ってるのがリンクしないので、あの映像とマスコミの伝え方。今のネット時代も同じことがありますけど。当時はマスコミやテレビ局しかそれができなかった。記憶と、その後に作られたイメージがごっちゃになってるんだなという感じがしてきました。

村田

やはりメディアって最大の記憶装置なんですよ。モーリス・アルヴァックスという研究者の「集合的記憶」という概念があります。それまで記憶というのは個人的なものだと認識されていたんですが、そうではなくて記憶は社会的なもので、自分が記憶しているものの大元は社会の記憶だと言ったんです。社会的な記憶を構築するのにメディアがすごく大きな役割を果たしていると言われてます。

私もここで皆さんのお話を伺っていて、これはメディアの話だなとあらためて気付かされました。今は個人で映像が撮れる時代になって、それこそテレビ局も個人の SNS で流れている動画とか個人が提供した画像をかなりたくさん使うようになってきた。メディアと記憶のあり方というのも今後変わっていくかなと思いました。

養輪さん、NHK で働いていて映像の使い方とかそのへんはどういう感覚でやってらっし

やるんですか？

菱輪

どう見られるかはもちろんそうですし。録画されて SNS とかで再び誰かが投稿して流されることもあるので。昔以上に、より映像の使い方は注意していると感覚的には思っているんですけど。

トイレットペーパー騒動の話でいうと、2020年のコロナ禍でトイレットペーパーがなくなった時に私は東京のニュースの現場にいて。直接そのニュースに触ったわけじゃないんですが、肌感覚として認識しているのはトイレットペーパーがなくなっていることさらに強調するのは良くないよねという感覚が社内にはあって。実際に放送で出たものを見ても、少なくとも東京の全国で放送しているニュースではトイレットペーパーの棚が空になっている映像はあんまりなくて。もちろん伝えているんですけど、さっき出てきたようなトイレットペーパーをいっぱい仕入れて販売してますという映像とともに伝えたり。そういう配慮をしているつもりではあるんです。

とはいっても当時の騒ぎが収まらなかった記憶もあって、トイレットペーパーがなくなっているのはデマです、嘘ですよということを。2020年の時は中国でトイレットペーパーを作っていてそれが入ってこないから売れなくなるんだ的なデマが広まったと聞いていますが、そういうデマはないよと伝えても実際に店頭になれば私も買おうとか、そう思うてしまう人間の心理としてあると思うんですね。結局、われわれがどう伝えても買い占め騒動は起きちゃうんじゃないかという。どうしたらいいのか、そこはわからない。

村田

よく言われるのは、テレビは「なんとかである」と言うのは得意だけど、「なんとかでない」というのはなかなか伝えられないと。

デマとか噂ってアイデンティティの問題でもありますよね。「知っていて教えてあげたい」とか。「私はこんなことを知っている」とか。私という人間がみんなとコミュニケーションをとる手段なわけですね。噂って最大のコミュニケーションなんですよ。

専業主婦の方が内職をしながらずっとおしゃべりをしていて、ものすごくコミュニケーション能力が高い一方、男性は会社で働いていて、定年退職すると社縁がぶちっと切れてしまって実は町内の方とあんまり関わっていなかったという話を聞いたことがあるんですけど。おしゃべりは最大のコミュニケーションなわけですよ。

その意味でデマや流言って、人を傷つけるのは問題ですが、本質的には人間のコミュニケーションなんだなと思うんです。赤井さんどうですか？

噂を信じちゃいけないよ

赤井

昔のコミュニケーションって善意のコミュニケーションだったと思うんですよ。人を悪くしないし。自分に必要のない情報は全部カットしてしまって、そういう話は広がっていか

ないし。そういうかたちだったと思うんですね。

現在のほうがその意味では怖いなと思います。なんでも全部広がってしまって、その選択ができてない。そういうところが恐ろしいなと。すごく迷惑がかかることもあるし。人間ってもっと賢くなってるはずなのに、そここのところは進歩してないのかなと思いますね。

メディアをどう受け止めるか。それはやっぱり本人がもっとしっかり受け止めて選択を自分でしないと。しないままでいろいろ伝えると怖いから、選択能力を持たないと。

村田

そうですね。今は情報を拡散する技術も全然違いますし。

(参加者)

拡散方法もだし、今はAIがめちゃくちゃなものを作ってしまうので。ありえないものが作れるでしょ。最近ではバイデン大統領が病気になって寝てる場面とか。

NHKの「映像の世紀」でやってましたけど、昔の戦争の映像で正しいのは湾岸戦争までで、それ以後の戦争の場面は記録としてはほぼ信頼できないかもしれないと。そうなるとう何を信じてええのやと。大変だと思いますマスメディアは。われわれ、受け手も大変やけど。

菱輪

見ていただく側の方々も、信じられないかもしれないという前提を知ってることが大事なのかなと。

(参加者)

第二次世界大戦の記録も、あれは人間が作っています。強い者が作った映像なんだけど。

村田

歴史は語る側が作るし、撮る側の視点も反映されてきたわけですが、そういうレベルをAIは超えてしまうということがありますね。

その意味では大学の現場も大変になってきています。レポートではなく、その場で書いてもらうテストみたいな形にしないと、評価が難しくなってきていて。

これだけAIが発達すると人間の仕事も奪っていくし、AIにできないことをできる人しか仕事が無くなってきたりもします。本当に大変な状況になってきたと感じます。

(参加者)

今日聞いていて、1973年の騒動は、2020年にマスクがなくなったという騒動と根本的に違うなど。愛があった。買いだめしても、もし足りなかったらご近所にあげるよという気持ちがあったけど、今は余ったら売ろかという。困った人にあげるという発想が今はない。この世知辛い世の中はどげんかせんといかん。

村田

若い人たちを見ていると、逆の動きもあるように思います。たとえば自分たちでワークス

ペースを設けて、いろんな職種の人と知り合ったり、そこで協働できるような仕組みを作ったり。

実は私、能登地震の直前に珠洲芸術祭に行ってきたんですが、そこには多くの若い人たちがボランティアで参加していました。珠洲を気に入って移住する若者も多いんだそうです。この震災のあとどうなるかはまた別の問題なんですが。

そういう意味でこれまでとは違うコミュニティのあり方を若い人たちが模索し始めている印象も持っています。人間としてみんなと切れてしまうのはやっぱり恐怖感があるので、彼らなりの新しい繋がり方みたいなものを探し始めてると感じます。

どうですか若い蓑輪さんは？テレビ局というマスメディアに勤めていて。その中でコミュニケーションやコミュニティのあり方をどう意識されていますか？

蓑輪

逆に対面のコミュニティって大事なんじゃないかと思うことがあって。AIによって作られる映像や文章とかも、今はなんとなく「これAIっぽいな」とわかりますよね。その精度が上がってきたらまた変わるんでしょうけど。

村田

今、対面にすごい価値が出てきていますね。音楽でいうと、最近、学生はみんなライブに行くんですよ。複製技術が発達して、高品質で音楽を聴けるようになったから、むしろ雑音とか温もりとかその場の一体感みたいなものを学生は求めているんだなと。必ずしも一方向だけに進んでいるわけではないんだなと思います。

(参加者)

定年退職して映画館に行くのが好きで、去年の8月に起きたミニシアターテロをご存じですか？『福田村事件』という映画なんですが、朝起きて6時7時頃に、大阪にミニシアターは2カ所ぐらいしかないんですけど予約して行ったら人がわんさかおるんですよ。満席。平日ですよ。なんで？と映画館の人に聞いたら「NHKの『クローズアップ現代』でやったから」と。それが8月は連日満員だったんですよ。超異常な立ち見がずっと続いたんです。これは関東大震災の時の噂を取り上げた映画で、これを観に来てる人たちはほんとにこの映画のことをわかって来てるのかなと。

村田

それこそ情報過多だから、自分では何が良いか判断するのが難しくなっているのもあるのかもしれない。

(参加者)

結局、自分がないんですよね。自分の選択肢がなくて、誰かやマスメディアが言っているのに乗っていくという。それって危ない話じゃないですか。昔から変わってない。自分で判断することにこだわると、逆に言うとなんか頑固になるのかもしれないけど。

村田

情報が多くなればなるほど判断に時間がかかるというか、たくさんの情報源に当たらないとどれがきちんとしているかわからない。みんな忙しいじゃないですか、お仕事もしてるし。たくさん見ていると、経験値で「これはおかしい」「これは大丈夫」とわかってくる。メディアリテラシーが身につけてきます。

「昔と変わらない」という点についてですが、私はマルクス的な進歩史観は嘘だと思っていて、歴史は繰り返すというか、人間は全然進歩していかないなど。とはいえ、いちおう社会学部メディア専攻で教員をしていますので、そうならないように、日々教育に邁進している次第でございます（笑）。なるべく学生が情報社会の中で生きていけるようにと思いつつ日々やっているつもりです…。

(参加者)

当時、千里中央には百貨店が大丸と阪急があり、トイレトペーパー騒動では大丸のほうに行列ができた。阪急のほうに並んだという話は聞いてない。阪急ではトイレトペーパーを扱ってなかったんですか？それとも写真に写ってなかった？

(参加者)

阪急の地下は食料品だけじゃない？上はいわゆる百貨店で。大丸は地下が食料品であるが専門店。だから百貨店にトイレトペーパーを買いに行く感覚はないと思う。

奥居

当時は、今に比べて百貨店はもっと百貨店らしかった。スーパーはもっとスーパーらしくて、はっきり分かれてたと思う。「大丸ピーコック」は名前がそもそも百貨店ばいスーパーですよと言ってるんですけど、スーパーなんです。「千里阪急」は百貨店の中では郊外店舗でカジュアルなんだけど、やっぱり百貨店なんですわね。

千里阪急にトイレトペーパーを買いに行くのはなかったんじゃないかな。売ってなかったんじゃないかなと思います。今のほうが業態が混ざってわかりにくくなっていますが。

赤井

当時は千里ニュータウンの近隣センターでもスーパーマーケットはほとんどなくて、市場みたいな所が多かった。

新千里東町の近隣センターは、今はなくなりましたが「ニッショー」というスーパーマーケットが入っていました。ニッショーの2号店。1966年の6月ぐらいに。それが千里ニュータウンにできたスーパーの始まりのほうでした。みんな普段は、対面販売で買っていました。その中で出来たのが、千里中央の大丸ピーコック。阪急はデパートですよ。阪急の地下も全部、対面販売でした。ピーコックができた当初は高級スーパーのイメージだった。普通の近隣センターの店舗に影響しない高級品を扱うスーパーということで、千里中央に大丸ができた。近隣センターの店舗に影響を及ぼしてはいけないという立ち位置ですわね。

奥居

津雲台に「ピーコックストア」が入ったのが、たぶん千里ニュータウンで最初の本格的スーパーだったと思います。あれは「ピーコックストア」。その後に千里中央にできたのは「大丸ピーコック」。同じピーコックが経営してるんですけど、グレードに差を付けていた。

村田

面白いですね。スーパーマーケットも奥が深くて、卒論を書いた学生がいます。これについてもまた話したくなっちゃいますが（笑）。

では最後に一言ずつコメントをいただいて終わりにしたいと思います。

菱輪

取材したことを1年ぶりに話すということで整理してたんですけど、考えれば考えるほどマスコミが悪いんじゃないかと思えてきて、責められないかと不安だったんですが（笑）。

ただ去年の放送でお伝えしたのも、もはや50年前のことは昔話になっていますがそれをきっかけにそれが今にも繋がっているということ。こうした会が開かれたように皆さんでその記憶を元に議論しあえる機会をいただいたのはすごい良かったなど。

さきほどおっしゃったようにテレビの影響力が大きいというのが今も続いていると聞いて、すごく気を付けないといけないところではありますが、勇気をもらったのでこれから私も頑張りたいなと思いました。今日はありがとうございました。

赤井

皆さんのお話を聞いていて、当時の話はだいたい共有している内容ですね。

でもね、団地が建て替わった新しい大きな高層マンションのお母さんたちと話をしていると、千里ニュータウンは昔こういう町だったということを全然ご存じじゃない。昔のことはまったく知らない人が住んでるんですね。住民が建替する時に苦労された方がいっぱいいらっしゃると思うんです。今あるマンションは住民がこれだけ苦労して一生懸命してできたマンションだということをやっぱり知ってほしい。だから町を大事にしてほしいという思いがあります。老婆心ながら。

PTAと交流があるので、その場でいろいろ言うんですね。するとみんな「ああそうやね」と言ってくれる。若い人にも千里ニュータウンの昔の姿を、こういう成り立ちであるんだよということも知ってほしいと思います。そういうのを若い人たちに伝えていかないと。

村田

さっき菱輪さんと雑談していたら、今回の話もどんどん聞けなくなっていると。情報をちゃんとアーカイブしておきたいとおっしゃっていて。それを今しておく必要があるんだなと思いました。その意味では歴史を伝える仕事はますます大事になってきます。私は博物館の研究もしていますが、そういう施設が日頃から地域を研究しておくことも重要なことだと思います。最後にその抱負もかねて奥居さん一言お願いします。

奥居

広告業界の出身者としてはメディアの肩を持ちたいなという気持ちもありまして。メデ

ニアにはパニックを打ち消したり、修正する力もあると思うんです。

今回の展示を作るために振り返ってみると、あの頃はメディアの数がすごく少なかった。テレビのチャンネルも少なかったし、みんな同じものを見ていた。ヒット曲もみんな「てんとう虫のサンバ」を歌ってたし、天地真理や山口百恵を聞いてた。少ないメディアの影響力がすごく強かった。

今のほうが散らばってわからなくなってるのは、ある意味で健康的な状態になっていて。展示のために当時のレコードを集めて、1973年に流行った曲を調べると、天地真理は絶対欲しい。山口百恵はデビューしたて。その2点はメルカリで買って補充したんですけど、もうひとつ当時すごく流行ってたのが山本リンダ。ところが山本リンダのレコードは高くて、しかも品切れで補充できてないんです。あの人は今でも現役なので、価値が高いのは面白いなと。山本リンダのヒット曲の歌詞がまさに「噂を信じちゃいけないよ」で始まるんですよ（笑）。みんな山本リンダをもっとちゃんと聴けと。

村田

おあとがよろしいようで…。昨日テレビでユーミンの特集をやっていたのですが、デビューアルバムの「ひこうき雲」も1973年なんですよ。文化的にも、社会的にもいろいろなことが変わった時代の中で、ニュータウンが出来て新しい生活が始まって、トイレットペーパー騒動が起きたということなのかなと思いました。

トイレットペーパーはたんなる話の触媒にすぎず、これが当時の社会、今の社会のメディアのあり方、いろんなものを伝えてくれていると感じました。

今回参加させていただいて私も勉強になりました。また皆さんのいろんなお話を聞いて私自身の記憶、集合的記憶、体験してないけれど知っている記憶が修正された感じがしてとっても面白かったです。会場のオーディエンスの皆さんにも御礼を申しあげたいと思います。本当にありがとうございました。

主催：吹田市立千里ニュータウン情報館

運営企画：一般財団法人 千里パブリックデザイン

後援：吹田市・豊中市千里ニュータウン連絡会議

文字起こし：AKIRA text create 山本晶

※1…ピーコックの特売は10月31日（水）とする番組映像もあり、2006年NHK制作の「あの目を抱きしめて」では、10月30日（火）を行列ができた日としている。騒動は千里ニュータウンの中でも数日かけて広がったと考えられる。

※2…（参考URL）<https://senri-nt.com/column/2020-03-30-toiletpaper/>